

組織的な若手研究者等海外派遣プログラム報告書

氏名： 本間 香貴	提出日：平成 25年 3月 6日
東南アジア研究所における職名： *右記の該当する職位に○をつけて下さい。(講師・助教・助手・ポスドク・博士課程学生・修士課程学生・学部学生)	
派遣先の研究機関等(調査を実施した国名・機関名(日本語で記載)及びカウンターパート名)： カンボジア・王立農業大学・Kim Soben *派遣先の研究機関等の種類について右記の該当する箇所に○をつけてください。(大学・研究機関・企業・その他)	
派遣先の研究機関等での職名：	
派遣期間： 平成 25 年 2 月 8 日 ~ 平成 25 年 2 月 14 日 (派遣日数： 7日)	
研究活動等の主な内容(該当する番号に○をつけてください。複数可) ①研究・実験 ②フィールドワーク ③セミナー ④インターンシップ ⑤サマースクール等の講習 ⑥学会出席 ⑦単位取得等 ⑧その他	
研究活動の主な領域(該当する番号に1つ○をつけて下さい。) ①人文学 ②社会科学 ③数物系科学 ④化学 ⑤工学 ⑥生物学 ⑦農学 ⑧医歯薬学 ⑨総合領域 ⑩複合新領域	
派遣の概要(500~700字程度) 京都大学とカンボジア王立農業大学および王立芸術大学の合同による“the 1 st workshop on interdisciplinary field work for sustainable livelihood studies”に参加した。参加者は日本側から京都大学や九州大学などの7人の教員、カンボジア王立農業大学から教員1名、リサーチスタッフ1名、学生11名、王立芸術大学から学生5名であった。初日に王立農業大学にてキックオフミーティングを行い、調査の目的や意義などに関してプレゼンテーションを行った。2日目より調査対象となるポーサット州に移動し、調査活動を開始した。 本間は主に阪南大学の矢倉准教授と組み、ジャスミンライスの導入実態およびその条件に関して、学生がフィールドワークにより調査できるように、下調べをし、また課題設定およびその遂行を行った。学生が参加した本調査は5日目である13日に行い、立地条件の異なる2村において行った。学生は2~3人の班に分かれ、各班は5農家ずつインタビューによる調査を行った。調査結果は6日目に取りまとめ、参加者による討論を行った。また全体ミーティングを行い、調査結果や今後の展望などについて討論を行った。	
事業に係る研究成果(500~700字程度) 今回の調査により、ポーサット州におけるジャスミンライスの導入実態およびその条件について概要が判明した。当初商品米としてタイからの導入案が濃厚であったが、栽培自体は古いところでは20年にも達し、また同一名称であっても異なる生態型が多数確認されたことなどから、在来品種あるいはそれに近い存在であると考えられた。ただしここ数年でその栽培は急激に面積を拡大しており、それは価格面での差別化が主要因であった。かつては付加価値がなく、他の品種と同等の価格で販売されており、早生というのが一番の選択基準であったが、現在では約1.5倍から2倍の価格で引き取られるため、商品米の導入が可能な条件ではほぼ確実に導入されていた。その反面、商品米としての制約が付き、揃いが悪いなどの品質面で問題ある場合は引き取ってもらえず、新たな問題が生じていると思われた。今後の調査方針としては、遺伝的な変異の確認や、品質面での相対的な評価、あるいはさらなる高品質化を目指した栽培学的な研究などが考えられた。 また、本調査を通じて本来の目的であった、カンボジア王立農業大学の大学院生と協働でデータを収集するための研究体制の構築に関しても、一定の目的が立ち、今後の同地域の研究についても弾みがついたと思われる。	

組織的な若手研究者等海外派遣プログラム報告書

氏名： 本間 香貴	提出日：平成 25年 3月 6日
東南アジア研究所における職名： *右記の該当する職位に○をつけて下さい。(講師・助教・助手・ポスドク・博士課程学生・修士課程学生・学部学生)	
派遣先の研究機関等(調査を実施した国名・機関名(日本語で記載)及びカウンターパート名)： インドネシア・ボゴール農科大学・Iskandar Lubis *派遣先の研究機関等の種類について右記の該当する箇所に○をつけてください。(大学・研究機関・企業・その他)	
派遣先の研究機関等での職名：	
派遣期間： 平成 25 年 2 月 15 日 ~ 平成 25 年 2 月 21 日 (派遣日数： 6日)	
研究活動等の主な内容(該当する番号に○をつけてください。複数可) ①研究・実験 ②フィールドワーク ③セミナー ④インターンシップ ⑤サマースクール等の講習 ⑥学会出席 ⑦単位取得等 ⑧その他	
研究活動の主な領域(該当する番号に1つ○をつけて下さい。) ①人文学 ②社会科学 ③数物系科学 ④化学 ⑤工学 ⑥生物学 ⑦農学 ⑧医歯薬学 ⑨総合領域 ⑩複合新領域	
派遣の概要(500~700字程度) ボゴール農科大学のIskandar Lubis講師と協働でチタルム川流域のチカラン州とカラワン州でイネの栽培歴および品種に関する調査を行った。当初はチアンジュール州において調査予定であったが、Lubis講師との打ち合わせにより、チカラン州とカラワン州での調査の方が重要性が高いと判断し、調査地を変更した。衛星からのリモートセンシング画像が得られた両州の40km四方を調査対象地とし、レンタルした車を用いて踏査した。16日はボゴールから途中約60地点にてイネの生育に関する調査を行い、作付パターンや栽培期間、品種に関する情報を収集した。	
事業に係る研究成果(500~700字程度) 今回の調査によりチカラン州とカラワン州におけるイネの作付パターンや栽培期間・品種に関する概要が把握できた。同地域ではチタルム川からの水路が発達し2期作もしくは3期作が行われている。そのため圃場ごとで作付時期が異なり、田植え前から収穫期までの水田が散在した。その一方で地域ごとでは作付が同期している場合が多く、同地域内におけるイネの生育ステージの変異は地域間に比べ非常に小さかった。従って比較的解像度の粗い衛星画像であっても、地域の平均的な作付パターンについては推定可能であると考えられた。また品種としては改良型と呼ばれる品種が圧倒的に多く、本田での栽培期間は非常に短いと推察された。そのため肥料の投入量が多く、物質収支は投入過多であると思われる。品種や栽培方法の最適化により、資源の有効利用化および環境負荷の軽減が可能であり、今後の重要課題であると考えられた。 一方、チタルム川下流の海岸地域では水田が養魚池に変換されつつあり、広大な面積で魚が養殖されていた。また河口付近の海では川からの土壌により水が茶色に染まっていた。上流の土壌浸食の防止が優先課題であると考えられる。 今後は今回得られたデータを基にイネの生育収量予測モデルを実行し、リモートセンシング画像を用いて予測値の最適化を行う予定である。それによる結果を基に同地域の栽培管理戦略を示していく予定である。	